

Valerie M. Hudson and Andrea M. den Boer,

Bare Branches: Security Implications of Asia's Surplus Male Population.

Cambridge, Mass : MIT Press, 2004,
x+329pp.

はやせやすこ
早瀬保子

I 本書の問題意識と特徴

1980年代後期にアジアで異常に高い性比が観察されたのを契機に、性選択実行の結果としての男性の超過と女性の不足の実態に関心が高まってきた。本書は、国内の政治的安定性や国際政治を考察する新たなアプローチとして、性比の不均衡問題に焦点をあて、中国、インドを中心とするアジア諸国で、男性人口が女性人口に比べ異常に過大である現況を21世紀社会の世界の安全に脅威を与えるものとして、問題提起を行い、今後の展望と政策的課題を考察するものである。本書における発想は、男性超過社会が国内のみならず国際的に暴力を誘発してきた歴史的知見から、世界で最も高い性比をもつアジアが世界の安全に脅威をもたらす可能性があるとする、やや奇抜とも思えるものであるが、それを裏付けようとする各国状況が、深刻な事態に陥る危険をはらんでいることに気づかされる。ここで性比は、女性人口を100とする男性人口の比によって表されるが、国連推計によれば先進地域の性比が2005年に94であるのに対し、アジアが104、アフリカが99、カリブ・ラテンアメリカが98であり、世界でアジアの性比が最も高い地域となっている（United Nations, *World Population Prospects*, The 2002 Revision, 2003. CDROMデータの中位推計による）。とりわけ、世界人口の4割を占めるインド、中国で性比が105以

上と高いことが、アジア全体の性比の高さに影響を与えている。著者はこれら2国を中心として、性比不均衡の社会経済的、歴史的背景を考察するとともに、男性超過の状況が国内および世界の安全に及ぼす影響などについて警告する。

本書のタイトルの一部であるBare Branchesは、中国語の「光杆儿」に基づくもので、葉が落ちて裸になった樹木や花の意が転じ、丸裸、一人ぼっち、家も財産もない人、素寒貧の人を指す。最近では、結婚できないため、家族もなく、社会から取り残された低い地位の若年成人男性の比喩として使われる。評者は、この部分を「独身男性」と仮訳した。本書は、Andrea den BoerとValerie M. Hudsonの共著で、Boerは、英国ケント大学（the University of Kent at Canterbury）政治・国際関係学部の国際政治の講師で、ジェンダー、人権、安全保障に関する研究を行っており、Hudsonは、米国ブリガムヤング大学（Brigham Young University）の政治学の教授で、外交政策、政治心理学、安全保障に関する研究で多数の業績がある。

II 各章の構成と内容

本書は、以下の7章から構成される。

- 第1章 環境と人類の安全確保に関するジェンダー的考察
- 第2章 子供の性別選好に関する歴史的視点——嬰兒殺し、性選択的中絶と女兒失踪問題——
- 第3章 インドの女兒失踪
- 第4章 中国の女兒失踪
- 第5章 高性比社会の独身男性——理論と事例——
- 第6章 21世紀の独身男性——政策的含意——
- 第7章 結論——高性比社会に対する安全の構築——

第1章では、本書が、資源不足や資源アクセスへの不平等が国内および国際的な紛争の原因となるという環境安全学の視点と、個人と国家の安全の相互

依存関係を扱う人類の安全保障学の2つに立脚することを紹介する。とりわけ、人類の安全保障を考察するために、これまで見落とされがちであったジェンダー的視点を取り入れたことが本書の特徴である。世界のどの社会においても、おそらく男女の不平等が、何らかの形式（政治、法律、社会、経済における女性の男性に対する従属的な地位、または男性より劣る取り扱い）で存在する。女性は男性と比較し、教育水準や栄養水準が低く、医療のケアも十分に与えられず、人生における重要な意思決定を自ら行うことができず、政治的、法律的、社会経済的権利や自由が少ないなど、ジェンダーによる不平等が各所に存在する。本書では、ジェンダーによる不平等が強度に存在する状況を、ジェンダーの差ゆえに、一方の性の乳児（通常は男児）が生存を許可され、他方（通常は女児）が生存を否定され、積極的（窒息死など）または消極的な方法（食物などへの男女差）で女児の過剰死亡が起きること、と定義する。女性より男性の価値が高い社会では、男児が女児より望まれる結果、女児に対する暴力によって、子供の性選択が実行される。こうした暴力は、女児嬰兒殺しや胎児の性選択的中絶による非正常な出生性比、乳幼児死亡率および5～14歳の死亡率や自殺率の性差によって推測、検証される。さらに、15～34歳の性比と社会における紛争との関係についてみると、暴力や犯罪の大部分がこの年齢層において行われている。性選択は、宗教的行為として、あるいは伝統のなかで、半ば公認されており、軍事衝突による男性人口の損耗、女性の略奪や不安定な生存資源など環境ストレスへの対応として、歴史的に行われてきたのである。

第2章では、現在および過去における性選択、嬰兒殺し、間引きの実態とその背景が、哺乳動物の実態をも含め、アジア、中東、アフリカ、オーストラリア・南太平洋諸国（18世紀後期のアボリジニや先住民）と古代ギリシャ、ローマと欧米諸国の状況について、文献などより検証される。程度の差こそあれ、ほとんどすべての社会で女児嬰兒殺しが行われてきた。15世紀ヨーロッパで、女児殺しや女児の遺棄が行われ、その背景として、インドで今なお一般

的である花嫁の持参金ダウリがあったことに驚かされる。日本でも江戸時代は間引きが一般的に行われ、親は家族の規模と性別構造によって嬰兒殺しを決断し、男児が多い場合は次子に女児選択、男女児同数の場合は男児選択が実行されたようである。

家族の資源が限られている場合には、経済的困難が嬰兒殺しの主たる理由であるが、その際男児が選好される理由は、男性労働が女性労働より高い価値をもち、家計への貢献や親の老後の世話や家計を支えるために重要であると考えられてきたためである。男児選好が強い地域は、女性の雇用機会が少なく、女性の教育水準が低い地域である。さらに文化的な慣習（前述の花嫁の婚資や宗教的儀式における男性の役割）が重要な地域では、男児選好が一般に強い。

男児選好は、男女の死亡率の差はもとより、出生時、乳幼児期や総人口の性比によって示される。高い出生性比は、胎児の性別判定技術の発達により女児の胎児を中絶することによっている。女児の乳幼児死亡率が男児に比較し高い背景として、保健医療サービスや男児への食物優遇によるものである。現在、アジアの性比が世界において最も高いことが知られているが、調査対象国中、バングラデシュやパキスタンは、女児嬰兒殺しが、一方韓国や台湾では、胎児の性別判定技術による女児の中絶が高い性比をもたらしている。南アジアや東アジア諸国（インド、パキスタン、中国、韓国、台湾）では、上記手段のいずれか、あるいは両方により、女性人口に比し男性人口の超過や女性の失踪として知られる現象を引き起こしている。世界の女性の失踪人口は、最近の推計によると9000万人以上と推測されているが、中国とインドがその9割を占める。

第3章、4章では、インド、中国について、過去と現在の性比の動向、高い性比の原因、各国における性比の地域差、政府や人々の高性比に対する懸念・対応、世界2大人口大国で男性人口が女性人口を超過していることの世界への影響などが扱われる。インドでは、女性の地位や女性に対する差別は、北と南、都市と農村、カースト、社会経済的地位、教育水準によって、大きな格差がある。また、家族内でも、女児の出生順位、家族の理想性別子供数によっ

て格差がある。インド北部の4州でインドの失踪女性の5割を占めており、女性への差別、女兒の中絶が、依然として実行されているようである。出生率の低下にともない男児選好の程度（出生性比）はわずかに低下したが、開発政策の進展による、社会経済的な変化と環境悪化が、女性労働の価値や地位を低下させ、男児選好が最近10年に高まった地域もある。2001年人口センサスの性比は107で、男女の数が等しいはずと仮定すれば、少なくとも3500万人の女性が過少、逆に3500万人の男性が過多と推測されている。

中国においても、子供の性別選択が過去のみならず現在も人為的に行われている。20世紀後半の経済改革が、伝統的な男児選好と一人っ子政策との相乗効果により、女兒殺しや胎児の性別判定技術の発展による女兒の中絶増加を引き起こしている。2000年人口センサスより、女性の方が男性より4100万人少なく、とりわけ15歳から34歳では男性人口が女性より20パーセント超過しており、1990年センサスと比べ、男女差が拡大している。中国社会科学院の推計によると、男性の6人中1人が結婚できないこととなり、男性の超過人口は1億人余りとなり、メキシコ人口を上回る。中国の現在の出生性比が高いことから、次世代の性比はより高い状況になることが予測され、インドも同様の状況にある。中国政府は、人口抑制を強調し、女兒の過剰死亡の実態には注意を払ってこなかったが、2000年の人口白書やその後の人口計画生育に関する文書で、胎児の性別鑑定の禁止や女性・児童の権益保護などを謳っている。しかし、その効果はまだ出ていないようである。

第5章では、性比不均衡社会における若年男性の過剰に関する理論的考察と過去における実証的知見を概説し、第6章では21世紀社会への展望、第7章で高性比社会の安全対策を述べる。19世紀中国では、定期的な自然災害で多数の餓死者が出たため、その対策として資源消費制限のため女兒殺しが一般的に行われた。女性が男性に比べ過少であったため、男性は晩婚となり、男性の25パーセントは生涯未婚を余儀なくされた。また長子相続制の下、遺産を相続できない男性も生涯未婚で経済的地位の低い者が多

く、これら未婚男性が地方の民兵になって暴徒化し、後に清朝政府に謀反を起こす10万人にのぼる反乱分子集団に膨れ上がった例もある。現在の独身男性は、潜在失業状態か、3Kの仕事に従事し、コミュニティとのつながりはほとんどなく、社会的にも見捨てられ、そのため犯罪への心理的抑制が働かず、暴力、犯罪の増加につながる危険性を有する。中国では、失業率の上昇にともないレイオフされた都市住民と農村の出稼ぎ労働者との仕事の奪い合いなどが起きており、都市の大量失業者の集積、犯罪率は上昇の一途にある。

中国、インドともに経済状況が相当長期にわたり不安定になれば、失業者の増大、生存資源の不足などにより、将来に希望を見出せない独身男性の増加が、政治への不信、抗議を高める可能性がある。政府の厳しい取締まりがあるものの、独身男性の集団による抗議や暴動は後を絶たない。法輪功グループのような政府への抗議集団は大部分が失業者集団である。独身男性は何かをきっかけとして、小さな火の粉から大きな炎へ転じる危険を常に有しているのである。政府は高い性比の状況を認識しており、社会の不安定化に対応する施策を検討している。最近の中国の地方選挙で候補者が、「独身男性に花嫁を見つけ、豊かにする」と公約している。政府は過去の最悪の暴力事件を再び引き起こさないために、独身男性や失業者への呼びかけと対策を講じる必要がある。中国、インドやパキスタンなど男性超過社会が、大量の独身男性をいかに統括するかが、今後の大きな政治問題となりうる。これら諸国は早急に正常な性比となるように、対策を講じなければならない。政府は若い独身男性の超過がいかなる影響を及ぼすかを理解し、性比拡大の実態を真摯に受け止め、政策に反映せねばならない。

Ⅲ 若干のコメント

本書は、政治学では一見無縁であると思われる性比の不均衡問題、特に男性の超過状況に注目するという新しいアプローチを用い、若年未婚男性の超過が社会的安寧に悪影響を与えてきたという歴史的考

察から、中国、インドなどの高性比社会の今後のリスクと対応を中心にとりまとめたもので、ジェンダーの格差の背景なども含め、優れた研究書といえよう。本書は、政治学、社会学、生物学、人口学、女性学（ジェンダー）などの各学問分野のみならず、これらの学際的な研究（著者は環境安全学と称しているが）によって、新しい研究視座構築に貢献したといえよう。

著者は、異常な性比社会、それは男性超過に限らず女性超過社会も社会に弊害をもたらすであろうと

断っているが、男性超過社会と暴力との直接的な因果関係については歴史的な経験を叙述したに留まり、必ずしも明快な理論が示されたわけではない。しかしながら、性比不均衡社会の社会経済的・政治的安定性への影響は、示唆に富むものである。幸い、2大人口大国の中国とインドの経済は著しく発展しており、グローバル化による人の移動の活発化が著者の示した問題を緩和する方向に導くことも期待される。

（明海大学非常勤講師）